飛んでいった凧が教えてくれたこと　年少　すみれ組

クラスでくらす

２月のある日、「自分でつくった凧をグラウンドで揚げよう！」と高校のグラウンドまで出かけました。その日は凧揚げにベストタイミングと言わんばかりのいい風が吹く日でした。ついたとたんに「わ～！！」と走ったり、「せーの」で一緒に走ったりと、立っているだけでも凧が浮くぐらいの風を全身で感じながら遊びました。子どもたちに「そろそろ戻ろうか」と声をかけようと思ったその時です。

「あー！！」という声とともに一人の子の凧がグラウンドの奥に飛ばされ、ひゅーっと空高く昇っていったのです。その高さはきっと 30mを超えていたことでしょう。その様子をクラスの誰もがどうなるかと見守りました。凧は隣の体育館の上を遥かに超えてふわふわと飛んで行ってしまったのです。

「わーん！！！」

飛ばされた凧の持ち主のＣちゃんは大号泣してしまいます。その声にみんなが集まってきました。

「Ｃちゃんの凧きっと幼稚園に飛んでいったんだよ」「飛んでいったの嫌だったね、悲しいね」「大丈夫だよ一緒に探そう！」「そうしよう」。そこにはＣちゃんに寄り添ったり励ましたりするみんなの姿がありました。「それじゃあ幼稚園に戻ったらみんなで探そう！」と意気込んで急ぎ足で戻りました。

どこかに落ちていることを祈りながら門を入って「よし、捜索開始だ！」と足を踏み出したその時です。園庭にいた子が「凧、飛んできてあそこにあるよ」と凧の居場所を教えてくれたのです。

その子が指さした場所は…なんと！！シンボルツリーのメタセコイアの枝でした。高くて手の届かないその場所に、凧はしょんぼりと引っかかっていました。それを見たＣちゃんはまたしても大号泣です。Ｃちゃんの姿に子どもたちは「大丈夫、取れるよ」そういってボールを投げてみたり、長い棒でひっかけようとしたりしました。どうにかして取ろうとする仲間の気持ちがそこにはありました。しかし、中々とれずに困ってしまいました。

すると、用務の先生が脚立と高枝切りばさみを持ってきてくれたのです。それを使って担任が何度か引っ張ったり押したりと格闘します。子どもたちからの「がんばれ」という声援をもらい、やっとのことで凧を救出できました。その姿にまたしても「わーん！！！」と涙を流したＣちゃん。担任とそこでずっとＣちゃんに寄り添ってくれていた仲間とみんなでハグをして喜び合いました。そのあと凧を修理して涙が笑顔に変わったＣちゃんはそおっと凧をしまいました。たった１時間の中に、この１年に育まれた子どもたちの目には見えない心と絆を感じ、担任は胸がいっぱいになりました。凧は大切なことを教えてくれました。（教諭・小川結花）

しらうめようちえん
園だより　2022年度 第⑨号

白梅学園大学附属
白梅幼稚園
2023年3月15日発行
小平市小川町１－830

青バッジにしかできないこと　年長　たか１組

クラスでくらす

卒園まで、あと少しの３学期をどのように過ごしたいか、子どもたちに尋ねると、「お祭りがしたい」という声が返ってきました。「幼稚園の子どもたちを呼んで、お祭りがしたい！」「青バッチにしかできないことをして、みんなを喜ばせたい」――そんな思いから、たか１組 25 名でのお祭りの準備が始まりました。コロナ禍でお祭りの経験が少ない子どもたちは、自分たちが知っていることを出し合い、チームをつくってお祭りの準備を始めました。「青バッチにしかつくれない本物みたいな食べものもつくろう！」と素材にもこだわってつくる様子がありました。オリジナルのお話を考えて劇にしたチームもありました。「お祭りには、金魚すくいがあったよ」「本当の水に金魚を浮かばせてやってみたいな」と実験を重ねながら、本物みたいに金魚が浮かぶように、そして、本物のポイのように、水につけると破れる紙を探し出すなど、本物らしさにこだわった金魚すくいができました。

射的も小さい子たちが危なくないように、それでも楽しめるものを考えだし、自分たちでも試していきながら、改良していく姿がありました。コマショーチームは、毎日練習をしながら、技を磨き、お客さんから見やすいようにどう並べばいいか、どの順に技を見せればいいか、クラスの仲間からも意見をもらって本番を迎えました。

当日は、緊張よりも「楽しかった！」「またやりたい」という声がたくさん聞かれました。自分たちがやりたいことだけでなく、小さい子たちのことを思いながら準備をしたこと、想像を働かせながらどうやったら楽しんでもらえるか考え、仲間と知恵を出し合ったこと、その結果、小さい子たちの喜ぶ顔を見ることができたことなど、今回のこの経験は、年長組の子どもたちにとって大きな喜びと自信になったことと思います。

「もうすぐ小学生になります。ぞう組さんよろしくね。また会おうね。」――たか１組の子どもたちがぞう組のみんなに送ったメッセージです。

自分のなかで問いを持ち続けながら、仲間ともよりよくなるように考え合い、一緒に取り組んでいくことの面白さと価値を感じ、仲間と支え合ってきた生活は、これからも子どもたちの中に残り、今後の支えとなってくれることと思います。（教諭・深田美智子）

たか2のせかい2（ツー）

年長 たか2組

クラスでくらす

もうすぐ卒園する年長として、来年たか２組になるきりん組に何か楽しんでもらえること、年長って凄いと思ってもらえることをしようと子どもたちに提案しました。すると、お祭り屋さん、電車屋さん、ビスケット屋さん、お財布屋さん、こまのショー、そしてみんなで大きな打ち上げ花火を上げたいということになり、「たか２のせかい２（ツー）」を開催しました。

初めは風船に花火を付けて上げようという案が出ました。やってみると、上がった時に模様が正面に向かなくて見えにくいと気が付き、子どもたちが「夜の色」と捉えている黒と紺色の画用紙に花火を貼って紐で吊るすことにしました。花火玉が上がると花火が開いた様に見えるよう、それぞれの役の人がタイミングを揃えて上げていきます。

花火が出来上がると次は、「音」への気づきが出てきました。上がっていく時の「ヒュー」、開いた時の「バン」、散っていく時の「パチパチ」という３種類の音があることに気が付いた子どもたちは、口で揃えて言う方法を思いつきました。実際にみんなで言ってみると、なかなかいい音がします。それを録音して流そうという意見が出て、タブレットで録画をしたものを聞いてみました。すると「あれ？これはだめだ」との声が漏れます。子どもたちが思っていた音ではありませんでした。そこで、楽器を使って音を出すという案が出ました。「ヒュー」はストローで笛をつくり、「バン」は段ボールを大太鼓のように叩き、「パチパチ」はペットボトルにビーズを入れてつくりました。それぞれがつくったものを持って順番に鳴らしてみると、より花火に近い音がしました。

お店屋さんでは、一つ一つラッピングされたチョコレート、本物そっくりな電車、本当に身につけられる腕時計やお財布、遊んでもらえる金魚すくいにスーパーボールすくいと、お客さんとして来場する年中さんにどれも喜んでほしいという思いをもって準備を進めました。こまのショーでは、個々の技を極めると同時に、みんなで息を合わせ「せーの」で回す練習もしてきました。当日は年中さんに喜んでもらえたことで自信をもたせてもらった、たか２組の子どもたちでした。（教諭・細井佑香）

ぞうぐみ劇パーティー

年中 ぞう組

クラスでくらす

１月末から、部屋ではお面やつくったものを身につけて役になり、劇の遊びを楽しんでいました。クラスで人気があったのは、「おんどりとひとかけらのダイヤモンド」と「こすずめのぼうけん」のお話です。おんどりと王さま、こすずめと鳥たちのやりとりや、くり返しの流れで動いていくところを面白がって、役を交代しながら遊んでいく姿がありました。

お化け屋敷の遊びでドラキュラや化け猫になっていた子たちは、劇の中でもネコ耳やマントなどつくったものを身につけてそれらの役になり、「てぶくろ」と「おんどり」のおばけバージョンが生まれました。新たに恐竜が仲間入りしたり、「やっぱり黒猫になる」とおばけの中でも役を変えたりしながら、おばけや恐竜のやりとりを楽しんでいました。

続けていくうちに、いろいろな役を楽しむ姿や、お気に入りの役でなりきっていく姿も増えていきました。お客さんを呼びにいく姿も出てきたところで、子どもたちにみんなで劇をすること提案しました。そして２月末、「ぞうぐみ劇パーティー」としてクラスで劇を見合うことになりました。

当日は、楽しみにしている姿もあれば、みんなが見ている中でドキドキしたり、照れたりしている姿もありましたが、それぞれの姿で前に立ち、自分の選んだ役になっていきました。劇が始まると、途中で「なんて鳴くんだっけ？」「早く出てきて～」「あれ……次どっち！？」となる場面もありましたが、一緒にやっている仲間や、見ている客席からも、「～って言うんだよ」「次出てきて！」「こうじゃない？」など、なんとかしようと声をかけていく姿がたくさん見られました。ちょっとしたハプニングにも、自分たちなりに思ったことを言いながら考えていたり、仲間の声を聞きながら動いたりする姿があって、自分たちで最後まで進めていく子どもたちの姿に感動しました。楽しい雰囲気の中、自分たちの力でできたことで、またひとつ自信にもなったことと思います。（教諭・大塚美帆）